

## 編集後記

ある私鉄のある駅で経験したことである。このようなことは日常的に発生しており、特別に珍しいことではないが、しかし、他人の目からすれば私もこれと同様な行為をしているかみせ、教育に携わる者として大変な喪失感もしくは虚しさ、さらには自己嫌悪感に耐え難くなる場所である。

この私鉄としてはその駅は急行や通勤快速などが停車する比較的に大きな駅であったが、昼下がりでホームは人も疎らで閑散としていた。私は急行電車に乗るべく、乗降口マークが記された付近で電気の架線とその向こうの空をぼんやりと眺めて、一時の気怠さを紛らわせていた。何時しか私の隣には50才半ば過ぎの身なりの立派な女性と、二十歳前後のその娘さんと思いき女性が立っていた。やがて急行電車が入ってきた。電車には意外と多数の乗客がおり、降車する者が車両の戸口からはじき出されてきた。私はドアの左によけ、娘さんは右に寄ってやり過ごそうとしたが、中年の女性はドアの中央に立ち、人混みに逆らいながら車内に突入しようと懸命の努力を試みていた。ホームに降りた人々は一様に不快な顔を彼女に向けながら、無言で階段の方に歩き去っていった。

通俗的な愚劣な性差別論をすることがここでの本意ではないし、それをやるつもりもない。彼女にも当然に若いときがあり、そのときには頬を染めながら端に避けて人々をやり過ごしたに違いないと思われる。さらに、電車の乗降ではそのようにすべきであると繰り返し学習させられた筈である。推測するに「他の人が席に座る前に、座りたい」といった気持ちが人混みの中で彼女の頭を占領していたのであろう。自分にとって取り敢えず都合で心地よいことを実現しようとするとき、往々にして人は「自分ばかりか他にとって」も心地よく都合な解の存在を忘れてしまう。実は教育に関わることは、一般の人を対象にすることであり、「自分ばかりか他」も等しく関わる事柄についてである。当座の決定が自分の都合のみに陥らないためには教育が必要となるが、容易に学習したものを忘却してしまう現場に居合わせると、教育ないし学習の無力さを痛感して余りある。

日本では1980代後半の土地バブルに続いて「失われた10年」などと謂われる長期の経済不況が発生した。銀行は大量の不良債権を抱え込んだが、その原因の1つは土地を担保に多額の融資をしたが、土地価格がその後大幅に下落し融資額の多くが回収不能になったことにある。ポートフォリオ理論によればリスクの低減には多銘柄への分散投資が必要であるとされるが、これに反して土地という単一銘柄に投資するといった暴挙を銀行は行っていた。近時のサブプライム・ローン問題も、中間に抵当証券、アセットバック、ならびに証券化などの現代の様々な投資技法が内包されているが、本質は土地だけに一点投資をしたことに変わりなく、日本での経験がどの程度まで学習されたのか、ここでも学習の虚しさを感じる。

しかし、アカデミズムにいる者にとって「学習の虚しさ」や「教育の無力さ」を感じたときには、反対にこのときこそ「学習」や「教育」が真に必要な局面であると考え、広い立場から発言すべきであろう。ただし、厳に慎むべきことは、大学教官はアカデミッシュなものであると考えてしまう世間の先入観を利用して、自らの自己満足や思い上がりにもとづく見解を恰も正当な意見であるが如く発言することである。数多の推考、考察ないし分析を前提に自らの見解を表明するといった自己規制が、最低限アカデミッシュに望まれるところである。今回の原稿は、このようなアカデミッシュの条件に相応しいものです。執筆者の皆さんに感謝いたします。